



©Andrew Bogard

指揮者 ケンショウ・ワタナベ

1987年5月14日 横浜生まれ。

2016/17シーズンよりフィラデルフィア管弦楽団アシスタント・コンダクター。2013年～2015年まで、ヤニック・ネゼ=セガンのもとでカーティス音楽院指揮科フェローを務める。2017年4月、体調不良のネゼ=セガンに代わり、フィラデルフィア管弦楽団定期演奏会にて、ピアニストのダニール・トリフォノフとの共演によりデビューを果たす。急な代役を見事につとめ、大喝采を受け、世界的な注目を集めた。2017/18シーズンは、フィラデルフィア管弦楽団のドヴォルザーク《ヴァイオリン協奏曲》にてヒラリー・ハーンと共演したほか、ファミリーコンサートやスクールコンサートなどの指揮を務めた。2018/19シーズンも同管弦楽団との契約を更新し、来シーズンの定期演奏会にも出演を予定している。

多くのオペラ作品を、カーティス歌劇場を中心に指揮しており、交響曲や管弦楽曲だけでなくオペラの分野も得意としている。近年では2015年にプッチーニの《ラ・ボエーム》、2017年に同じくプッチーニの《つばめ》などを指揮。また、モントリオール歌劇場では、新演出によるR. シュトラウス《エレクトラ》で、ネゼ=セガンの副指揮者を務めた。今後、メトロポリタン管弦楽団（モントリオール）との再共演のほか、ヒューストン交響楽団、ロイヤル・スコティッシュ・ナショナル管弦楽団と初共演を予定している。

ヴァイオリニストとしても活躍しており、イェール大学音楽院でヴァイオリンを専攻し修士号を取得。2012年～2016年までフィラデルフィア管弦楽団にてヴァイオリンのエキストラ奏者を務める。若手音楽家の訓練・育成の重要性を感じ、2007年より「グリーンウッド音楽キャンプ」にスタッフとして参加、現在はオーケストラ指揮者として活躍している。

カーティス音楽院卒業。在学中は指揮をオットー=ヴェルナー・ミュラーに師事。そのほか、イェール大学で分子・細胞・発生生物学を学び学位を取得している。

ケンショウ・ワタナベ <https://www.kenshowatanabe.com/>



マーカス・ロバーツ・トリオ

ピアノ:マーカス・ロバーツ
ドラムス:ジェイソン・マルサリス
ベース:ロドニー・ジョーダン

1995年、マーカス・ロバーツによって結成。

ジェイソン・マルサリスが結成当初よりドラマーを務め、グループの発展に重要な役割を果たしてきた。2009年にロドニー・ジョーダンが加わり、その豊かな音楽性と深い理解は、いまやトリオのサウンドに欠かせないものとなっている。

この3人のミュージシャンで構成されるマーカス・ロバーツ・トリオは、当意即妙な音楽作りと独創的な想像力で知られる。ロバーツはこのトリオの結成により、音楽の方向性を探る上で、対等なパートナーとして3つの楽器に等しく光が当たる、新たなジャズ・トリオのスタイルを生み出した。いずれのメンバーも、旋律や和声構造を損なうことなく、テンポ、調性、拍子など、曲のさまざまな要素をいつでも変えることができ、あたかも最初からそう決めてあったかのように、軽々と自由に音楽の方向を転換してゆく。

マーカス・ロバーツは常々、歴史を重視してきた。彼にとって、偉大なミュージシャンとは、自らが携わる芸術の歴史を深く理解し、熟知している者のことである。そのように自在に操ることができてこそ、真に価値のある斬新な音楽の創造が可能になる。マーカス・ロバーツ・トリオの極めて現代的なサウンドは、ニュー・オーリンズに遡るそのルーツから生じ、コルトレーン・カルテットのグループ即興スタイルやビバップ・ミュージシャンの超絶技巧を経て、モダン・ジャズまで続く流れの中に培われたものである。マーカス・ロバーツ・トリオのサウンドは、パワフルでリズムック、力強くメロディックであり、グループおよび個人の高度な即興に溢れている。

マーカス・ロバーツ・トリオ <http://marcusroberts.com>